

一塗手桶

五拾

松平和泉守乘壽略○中

一手桶

五十

本多下總守忠良

〔日光山志四〕栗山郷 十ヶ村鹽谷郡なり略○中 冬は家に居て木鉢、木杓子、木履等を作るもあり、近來栗山桶として曲物造の器を出す、是は谷川の水を汲取桶なりといふ、

桶用法

〔日本靈異記下〕產生肉團之作女子修善化人緣第十九

肥後國八代郡豐服郷人豐服廣公之妻懷任寶龜二年辛亥冬十一月十五日寅時產生一肉團其姿如卵、夫妻謂爲非祥、入筒以藏置之山石中、徑七日而往見之、肉團殼開生女子焉、

筒介乎

〔今昔物語二十六〕利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七

今昔利仁ノ將軍ト云人有ケリ略○中 奇異ト見居タル程ニ、五斛納釜共五ツ六ツ程搔持來テ、俄ニ

杭共ヲ打テ居エ渡シツ、何ノ料ゾト見程ニ、白キ布ノ襖ト云物著テ中帶シテ、若ヤカニ穢氣无

キ下衆女共ノ、白ク新キ桶ニ水ヲ入テ持來テ、此釜共ニ入ル、

〔寶藏四〕桶

生老病死は、御ほとけもまぬかれ給はぬ道なり、されば去らざるを愚なりとし、去りてなげくも次に愚なりとす、あら玉の年立かへる朝には、若水桶に千世をむかへて、去年もめでたし、今年もめでたし、めでたしといひかさぬれば、いつそのほどにわがくろかみも、白川のみつはくむまで老さらばへり、せめてはさあるのみか、棺桶にうつろへり、棺桶も猶此世の姿をのこせるに、程なくけむりともえはて、思ひもつくる灰のうちよりひろひ出て、骨桶にをさめらるゝぞいとほかなき、かねてかゝる理を去らまし、かばなど世を鮫桶のなれ過、砂糖桶のあまくのみやは心得ん、ちよのふがいたゞく桶のそこぬけて、みづたまらねば月も宿らずといへるこそいとを